
闇の中のヒカリ

葉月華南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇の中のヒカリ

【Nコード】

N9791L

【作者名】

葉月華南

【あらすじ】

宝玉、それを手に入れた者は願いを叶えることができるという。

世界は宝玉を巡り、幸せに暮らしていた少女を巻き込み闇に落ちていく。

今、少女の決断が世界を変える！

1 始まり（前書き）

初めまして（*^□^*）

葉月華南です

この作品が初投稿& a m p・初連載になります

頑張っていきますので、
よろしくお願いします

1 始まり

わたしはいつ闇の中から抜け出せるだろう

もし、あの時わたしが違う道を選んでいたら……………

違う未来が待っていたのかな

薄暗い部屋の中、黒い洋服を着た男たちはパソコンと向きあっていた。

そのなかの1人のメガネをかけた長身の男はパソコンから手を離し

「やっと見つけた……
もうすぐ迎えに行くぞ」

と笑っていた。

男は立ち上がり、

「また1つ宝玉が揃う」

と笑いながら部屋を出て行った。

男は通路を歩き、ある部屋の前で立ち止まるとノックをして、部屋の中に入っていた。

部屋の中はいかにも高そうな机と椅子があるだけの簡素なものだ

電気はつけておらず、窓から月の光が差し込み、その光が部屋の中にいる者を照らしている

椅子に座り窓の外を見つめていた男が

「柊、みつけたのか」

と問うと、柊と呼ばれた男は「はい」と応えた

男は振り返り、

「誰をみつけた？」

と柊に聞くと

柊は

「冬海 露です、氷雨様」

氷雨は立ち上がり、窓へと近づくと振り返り柊をみつめ、

「必ず連れてこい、

冬海 露をBlue Roseに、私のもとに」

と微笑に笑いながら柊に命令する

柊「必ず、氷雨様のもとに連れてまいります」

と言うと一礼し、部屋から出ていった

氷雨は窓からみえる月をみつめ、

「ずっと待ち望んでいた。早く私のもとへこい、どんなことをしても手に入れる」

と呟いた

部屋を出た柊は無線で部下に連絡し、

「冬海 露を捕まえに行く、準備しろ」

と命令した

この時、柊は気づいていなかった

柊のことを後ろからみている青年に……

く朝く

「…にげろ…」

逃げろ……つゆ!」

少女は目を覚ました

少女はこの頃、不思議な夢をみるようになった

その夢は、少女より少し年上の青年が必死に少女に何かを伝えようとしていた

それが今日の夢でやっとわかったのだ

——彼は、なぜ私の名前を知っているの？
そして「逃げろ」とはどうゆうこと…

少女はもっと考えようとしたが、部屋をノックする音に思考は途切れた

カチャ

扉が開く音がしてそっちに目を向ければ、優しく微笑んでいる母がいた

「露、おはよう。早く着替えて朝食を食べにきなさい」

そう言つと母は部屋から出て行つた

母を待たせるのは悪いと思い、私は着替えをし、足早に母が朝食を並べ待っている部屋に向かつた

く朝く

リビングのドアを開ければ、朝食の美味しそうな臭いが立ち込めていた

母「露、運ぶのを手伝ってちょうだい」

露「はい」

私は返事をする母に近づいた。母はスープを器によそつと私に渡してきた。

私が運び終わり椅子に座ると、母も席に座った。

そしていつもと変わらない母と二人きりの食事が始まった。

私には父親がない。

昔、母にどうして私には父親がないの？と聞いたら、母はどこか遠くをみつめ、哀しそうな顔をした。

それ以来私は母に父のことを聞かなくなった。

母も私に父のことを話すことはなかった。

母との生活の中で、父がいなくて寂しいと感じたことはない。私にとって父がいないのはあたり前だったし、なにより母との生活はとても幸せだからだ。

母は優しく、時には厳しく、私を愛情いっぱい育ててくれた。

だから、私は夢にも思わなかった……

この幸せがあんなにも簡単に失われてしまうなんて……

く朝く

朝食を食べ終わり、後片付けをして部屋に戻ろうとすれば、

母「露、ちょっと待って」

私は立ち止まり母を見る

露「なに？」

母「ちょっとお願いがあるの。森の中に行つて薬草を採つてきてちょうだい」

露「いいよ。でも、どうして？この前採ってきたばかりなのに！」

母「ちょっと足りなくなったのよ。だから行つてきて。」

露「わかった。今から行つてくるね」

私がそう言つと、母が薬草を入れる籠を渡してきた。

私は籠を受け取り玄関に向かった。

扉を開き、外に一步踏み出そうした時、後ろからパタパタと小走りに近づいてくる足音がした。

私が振り向くと母がいた。

母「露、これを持っていきなさい」

母はそういつと、私の首にある物をかけた。

それは、母がいつもつけているネックレスだった。

このネックレスは、透き通るような碧色をした石がついているだけのシンプルな物で私は気に入っていた。

母はこのネックレスを、私が怖い夢を見た時や一人で淋しい時に「御守りだよ」と言って私に貸してくれた。

だから、今回も私を心配してネックレスを貸してくれたのだろう。

私は母に「ありがとう、行ってきます」と笑顔で言っていると扉を開け外に出ていった。

この時、私は気付かなかった母が目には涙をためていたことに……。

扉を開け外に出ると、空は厚い雲に覆われ、湿気を含んだなま暖かい風が通り抜けた。

もう少ししたら雨が降ってきそう。降ってくるまでに戻ってこれるかな？

私は空を一度見上げ歩き出した。

薬草のある森は家を出て、10分ほど歩けば着く。

もともと家が森の近くにあり、私は小さい頃から森で遊んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9791/>

闇の中のヒカリ

2010年10月9日01時11分発行